慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	羅馬人の都市生活(上)
Sub Title	
Author	島田, 久吉(Shimada, Hisakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.37(219)- 56(238)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

羅馬人の都市生活（上）

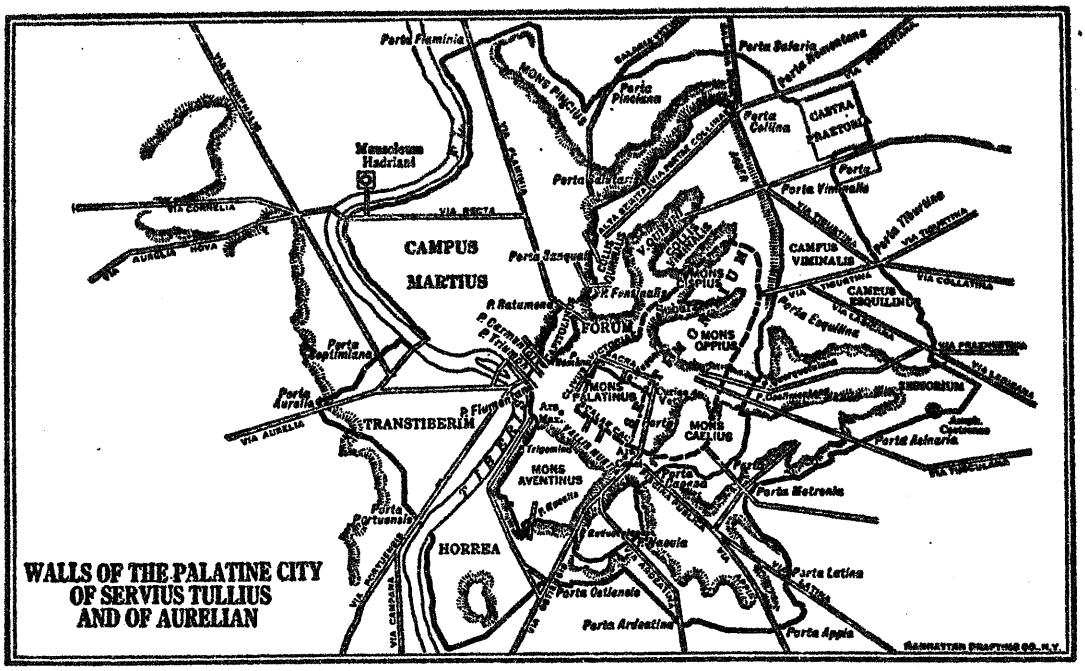
島田久吉

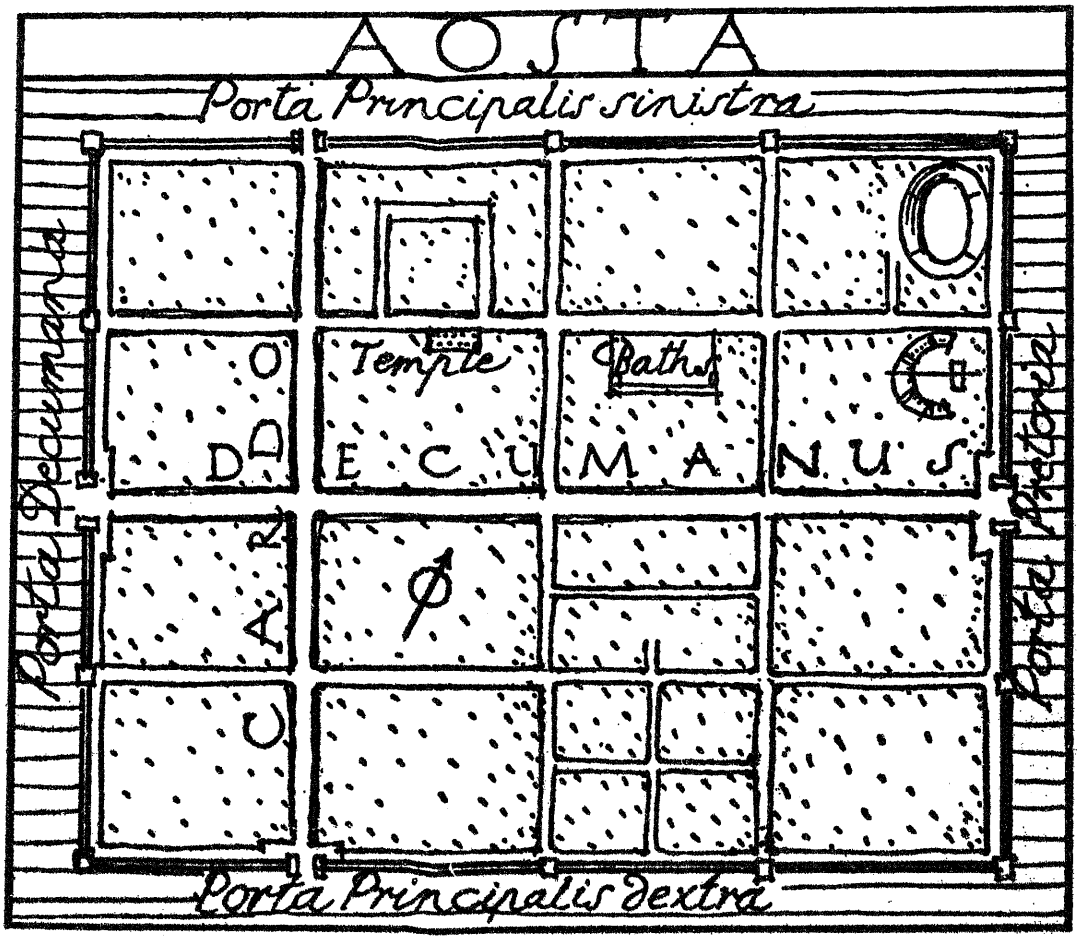
一

ローマ人は偉大なる都市生活者である。勿論、都市生活はローマに肇るものではない。都市の濫觴は或はナイルの溪谷にありと云はれ（メンフイス・テーベ）或はチグリス・ユーフラチスの溪谷にあり（ニネベ・バビロン）と云はれてゐる。更に希臘に於る都市國家の成立以後は、都市生活は實に人類文化發展の中核をなしたものであつた。獨立せる文化生活、並に政治生活の中心たる都市を建設したのは希臘人にありと云はれてゐる。希臘に於る諸都市は太古の單なる宗教に基く所謂神の市（シテ・ディヴアン）のみに非ず、亦、單なる王城の地たる所謂宮處（ミヤコ）（レジデンシアル・シユタツト）にも非ず、或は單なる交易の中心地たる市場（エンポリウム）に過ぎないものではなかつたのである。ミレトス、アテネ、コリントの如きは實に高い程度の政治的、經濟的生命力を有する卽ち近代的意義に於る都市自治體と看做

し得るものであつた。然し乍ら、希臘に於ては未だ都市と國家との分化が發見されず、亦、その都市生活も、田野生活より截然と區別し得られるものではなかつた。この時代は政治的に見れば市邦時代であり、文化的に見ればセミ・リユーラルの時代と云ふべきである。ローマと雖も無論かゝる市邦として興つたものであるが、その政治的發達の過程に於て、市邦より超脱し、その文化的發達の過程に於て、純然たる都市生活を完成するに至つたのである。嚴格なる意味に於る都市生活はローマに肇ると云つても敢て過言ではないであらう。

ローマ發展の歴史は實に都市の征服及び建設の歴史であると云つて差支へない。これローマ帝國は畢竟、都市の集團に過ぎないと云はれる所以であり、亦、近世都市生起の一原因としてローマ都市再生説が唱へられてゐる理由である。ギボンは古代イタリヤには千二百の都市があり、ゴール地方も亦同數の都市を誇り、スペインには三百六十の都市を算へ、アジア・アフリカに於てすら、夫々、五百、三百の都市が存在したと傳へてゐる。併し乍ら、彼は都市と云ふ言葉を甚だ廣い意味に使用してゐるのであるから、是等の數字を以て、直に現今の意味に於る都市の數字を表すものと考へてはならぬ。彼の都市と稱するものの中には單に農耕者のみの住居する小規模な村落が多數含まれてゐることは疑ない。抑も現今に於ても、都市の定義は甚だ漠然たるものであるが、一般に二千五百人以上の人口を擁する聚落を半都市(セミ、アーバン)と云ひ四千人以上を四級都市、八千人以上を三級都市、二萬五千人以上を二級都市とし、十萬人以上の人


Porta Flaminia
Porta Salaria
Porta Nomentana
Porta Pinciana
Porta Collina
CASTRA PRAETORIA
Porta Viminalis
Porta Tiburtina
Mausoleum Hadriani
VIA CORNELIA
VIA AURELIA
VIA CLODIA
VIA SACRA
CAMPUS MARTIUS
Porta Salaria
CAMPUS VIMINALIS
CAMPUS ESQUILINUS
Porta Esquilina
FORUM
MONS OPPIUS
Porta Septimiana
Porta Aurelia
TRANSTIBERIM
MONS PALATINUS
MONS CAELIUS
MONS AVENTINUS
Porta Salinaria
Porta Metronia
Porta Portuensis
HORREA
Porta Latina
Porta Ostiensis
Porta Ardeatina
Porta Appia
WALLS OF THE PALATINE CITY
OF SERVIUS TULLIUS
AND OF AURELIAN


AOSTA
Porta Principalis sinistra
Porta Decumana
Porta Praetoria
Temple
Baths
DECUMANUS
CARDO
Porta Principalis dextra

口を抱擁する都市を一級都市或は大都市と呼んでゐる。然らばローマに於る是等の都市の位置はどの程度にあるかと云ふのに、以上ギボンの擧げたる數字の内、少くとも大都市と稱し得べきもの十指に餘るとしても誇大な計算ではあるまい。イタリヤに於るヴエロナ、アキレイヤ、パドア、ミラノ、ラヴエンナ、希臘に於るカプア、コリント、亞細亞に於るラオヂケア、ペルガムス、スミルナ、エフエススは何れも大都市の名に背かず、ゴールに於る、マルセーユ、アルル、ニーム、ナルボンヌ、トゥールーズ、ボルドー、オータン、ヴイエンヌ、リオン、ラングル、トレーヴの如きは、ギボンがその衰亡史を著したる時代より（千七百八十年）寧ろローマ時代の方が却つて盛大であつたと云はれ、更にシリヤの首府アンチオキア、埃及の首府アレキサンドリヤに至つては人口五十萬以上を擁したことが證明せられると云ふ。

是等の都市は何れもローマ人によつて、或は征服せられ、或は再興せられ、或は建設せられたものであるが、各々、ローマ治下に於て行政上の一單位をなしたものであり、その性質に於ては今日に於る地方團體に頗る近似せる法的地位を認められたのである。地方團體に一種の法人格を賦與したのは實にローマに肇ると看做されてゐるのである。故にローマは啻に都市生活に於て近代に寄與した許りでなく、都市の法理的觀念に於ても大なる貢獻をなしてゐるのである。都市史上に於るローマ人の足跡は誠に偉大なりと云はねばならぬ。

二

ローマの諸都市は其の性質に應じて、之を大體コロニア(Colonia)、ムニシピウム(Municipium)、キヴイタス・フエオデラータ(Civitas Feoderata)、キヴイタス・インミユニス(Civitas immunis)、キヴイタス・スチペンヂ(Civitas Stipendiaria)、アリア、プレフエクツラ(Praefectura)の六に分ける事が出來る。コロニアと云ふのは所謂植民市であつて、之にローマ植民市(Colonia civium Romanorum)とラテン植民市(Colonia Latinorum)とがある。ローマ植民市の方は普通三百人のローマ市民を派遣して建設したもので其の數三百八十一あり、ラテン植民地の方は數千人のラテン市民を派遣したもので其の數六十一あつたと云ふ。之等は孰れもローマの分家、もしくは支店の樣なもので、殆んどローマ市民と同樣な權利を持つて居つた。ムニシピウムはローマ人の植民したものでなく、征服によつてローマに合併せられた都市であり、ローマ市民權を賦與せられたものである。これが植民市と相違してゐる處は植民市がローマの法律によつて支配せられたのに反して、其の土地固有の法律によつて支配せられたことである。次ぎに、キヴイタス・フエオデラータは所謂同盟都市で、完全なる自治權を賦與せられた都市であり、カヂス、マルセイユ、メッシナ、アテナの如きが之である。又キヴイタス、インムニスは免稅都市もしくは自由都市と云はれ、自治權は同盟都市の如く完全なものではないが、ローマに入貢する義

務を免ぜられた都市であつて、ウチカ、スミルナ、エフエススの如きが之である。之に反して、ローマに入貢の義務を負つてゐるのが、キヴイタス、スチペンヂアリアで更に最後に何等の自治權を有せず、ローマより派遣せられたる地方官によつて統治せられたのが、プレフエクツラである。今、之等の諸都市の自治制度或は行政組織について述ぶる遑もなく亦、本小篇の目的でもないが、大體に於て、之等の都市の市政は、首府ローマの市政をよく反映したものであり、その都市生活はローマの夫れを縮少したものであると云つて差支へ無い樣に思ふ。この點に於て首府ローマは實にマザー・シチーである。故にローマ人の都市生活を見るのは首府ローマに於る都市生活を觀察するのが捷徑である。しかるにローマに於る都市生活は從來あまり研究せられてゐない。之は如何なる理由によるかと云ふに、卽ちローマ市なるものの特殊な地位が其の市政のみを切離して研究するのに或種の困難を與へてゐるからである。我々はローマを以て例へば今日の東京が日本の首府であると同じ意味に於てローマ帝國の首府であると考へてはならない。東京市の市民は日本の他の地方の住民に對して何等特別の權利を有してゐる譯ではない。然るに都市としてのローマは他の地方に對して絕大なる特權を有してゐたのであつて、其の領地並びに諸民族の上に主權を行使してゐたのである。一言にして云へばローマは一の主權都市である。之の理由から、我々は兎角、ローマを其の帝國的方面から考察する傾向あり、一都市としての存在があつた事を屢々忘却する。しかし乍ら、ローマ市にはその帝國的方面から全く別個の單に一の都市としての活

動並びに問題があつたのである。卽ち人口稠密の問題、住宅問題、道路の問題、給水衞生の問題、公共娛樂の問題、社會施設の問題等があり、更に現今の重大問題たる市政腐敗の問題もあり、殆んど現在の市政の問題は悉くローマ市の當面せる問題であつたのである。ローマ帝國の政治的社會的問題は勿論非常に興味あるものであるが、ローマ市そのものの市政問題も亦之を輕視する事を得ない。否寧ろその市政問題の方が遙に近代的見地からの研究にとつて、吾人に示唆に與へる事の大なるを覺ゆるのである。

三

ローマ市建設の傳說、並びに當初の事情は措いて、最も簡單に市域の發展を述べれば、大體、七期に分ける事が出來る。

第一期はパラチノ市であつて、パラチノの丘の上に石の城砦を廻らした時代である。方形ローマ（Roma Quadrata）と稱する時代が之であつて、面積凡そ四分の一哩平方である。第二期はセプチモンチウム卽ち七丘市と稱せらるる時期でパラチノの外に東に於てカエリウス、東北に於てエスクイリスヌの丘の麓を包含するに至り、之を七區に分けた故に七丘市と稱せられるのであつて、同じく城壁を廻らしたが、パラチノの城壁程のものではなかつた樣である。第三期は四區の市と稱せらるるもので、之はカエリウス、エスクイリヌスの丘を越えてオピウスとキスピウスを取入れ、更にクイリナリスとヴイミナリ

スを抱き込んだ。四區とは之をパラチナ、サブラナ、エスクィリナ、カリナの四區に區分したからである。第四期はセルヴィウスの市で更に南方に延びてはアヴェンチヌスを包含し西に延びてはカピトリヌスを加へた。之の城壁は今日處々殘存してゐる。第五期は共和時代の市で之の時代に市域は非常に發展し、又ローマの國力の增進は城壁を必要としない迄に至つた。この時代の市域は周廻大凡そ十哩で、その外、市中を距る一哩位の邊までは街道に沿ふて家屋が並んでゐた樣である。第六期はアウグスツスの市で十四區の市と稱せらるる。市内は著しく整理せられ、美化されたことはアウグスツスが瓦石のローマを化して大理石のローマとなしたと豪語したと傳へられてゐるので分る。十四區の市と云ふのは市内を十四に區分したからである。第七期はアウレリウスの市で、之の時代には北方民族侵入の脅威を受くる樣になつたから、例の有名なるアウレリウス城壁を廻らし、之が今日殘存してゐる最後の城壁である。兎に角、共和時代の末期から帝制時代の初期にかけて、ローマ市は發達の頂點に達したもので、その市域、少くとも九百萬平方米の面積を包含したと云はれる。

次にローマ市の人口であるが、その建設當初より紀元一世紀末の最盛期に至る間に於る、ローマ市の人口の正確なる數字は、遺憾ながら甚だ分明でない。之については相當開きのある推定が行はれてをる。初期のラチウムの面積についても各種の推定があり、或は大略三百八十平方哩とされ、或は五百平方哩と云はれ、或は七百平方哩と稱せられてゐる。隨つて其の人口推定にも非常な差違が生ずる。ラチウム

の中心であるローマ市邦の面積も、甚だ明白でないがモンゼンは大凡そ百十五平方哩としてゐる。デルブリユクはローマ領全部で六萬人の人口を越えなからうと推算し、モンゼンはローマ市のみで三千三百人の軍隊を出したる記錄に鑑みて、公民一萬人と推定する。フエレロは全人口を十五萬人と概算し、更に大なる推定は市部廿萬人、地方も之と同數の人口を擁したとしてゐる。

元來、ローマでは十七歳より六十歳迄の公民は凡て兵役の義務ありとせられ、之の軍制の必要からセルヴイウス時代より國勢調査、正確に云へば兵勢調査が行はれてをつた。しかも其の數字は今日まで傳はつて居るのである。而してこの十七歳より六十歳までの公民は全公民の約三割に當るとせられてゐる。セルヴイウスの軍制に於て、二萬人近くの兵力を繰り出し得たと傳へられゐるから、之の割合で計算すれば公民大凡そ六七萬と云ふ事になる。毎五年に一回行はるる國勢調査の數字を、茲に擧げるのは、その煩に堪へないが、二、三の數字を擧げると紀元前二百九十四年に二十六萬二千三百二十一人となつてをり、百年後卽ち百九十四年に於て二十四萬三千七百〇四人とあり、百十五年には三十九萬四千三百三十六人、八十六年には四十六萬三千人となつてをる。若しこの數字が全公民の三割に當るとなると、ローマは紀元前三世紀に於て、已に百萬人の公民を擁したことになる。但し之の數字は公民のみを表はしてゐるから全住民の數字と云ふ譯には行かぬ。全住民の數字については、ローマの史家ハリカリナソスのデイオニシオスが、國勢調査の數字の四倍が、全住民の數であると云つてをる。然し乍ら初期の國勢

調査の數字は固より眞を置く譯には行かず、加之、其の數字はローマ市内に住する公民ばかりでなく地方に住する公民をも含んでゐるから、この數字を基礎としてローマ市の人口と推定する事は出來ない。

ローマ市の城壁が完成せられたのは已に敍べたセルヴイウスの城壁であつて、この城壁に包まれたる面積は不思議な位、廣大であるけれどもこの時代の城内の面積の大部分は空地であり、家屋の數は僅少であり、住民の多くは城外に居住し、外寇の場合のみ城砦たる役目を果したものと看做すべきであらう。故に之の時代の市内人口はごく僅少であつた譯であつた。しかし乍ら共和時代の末葉に於ては、之の空地は殆んど全部、建築物を以て埋められ、猶、市街の發展は城門を去る一哩の地點まで及んだことは前に申した通りである。しからば之の時代に於るローマ市の人口はどの位かと云へば、之にも各種の推定がある。大方の史家はローマ市の最盛時に於る人口、百萬より二百萬なりと頗る大まかな勘定をしてをる。ギボンは百二十萬と推定しマルクワルトは百六十萬と推定してをる。若し市内人口測定の方法の基礎としては國勢調査による公民の市部、地方の割合と市内住宅區域の見積りと、並びに、ケーザルの時代に於て、食料品の無料配給を受けた市民の數字である。幸にスエトニウスは食料品の無料配給を受けた市民の數を傳へてゐる。卽ちケーザルは三十二萬人の市民に對して食料を配給してゐるのである。之の三十二萬人の貧民が全人口の四割に該當するとして、ケーザルの時代に於るローマ市の人口は八十萬人と

云ふことになる。しかし乍らローマ市に於る貧民の總數は全人口に比して相當高い割合に昇つてゐる樣であるから、彼の時代に於る全人口を八十萬とするのは少しく過大かも知れない。最も穩當なりと思はれるのは、紀元前二世紀の初期に於て十五萬人、中葉に於て四十萬人、紀元前の最終期、卽ちアウグスツスの時代に於て、五十萬人、一世紀末の最盛期に於て八十萬人と云ふ推定であらう。ランチアニは市內八十萬人、カンパニア二十萬人、併せて百萬人と推定すれば大過なき處であらうとしてゐる。ベロッホも市內全人口を大體八十萬人としてをる。勿論正確なことは云へぬが大體之の邊が相當の處と思ふ。少くとも百六十萬とか二百萬とか云ふ數字は到底考へられないことである。

次に之の八十萬人のうち、市民と奴隸の割合であるが、例のマルクワルトは市民七十萬、奴隸九十萬として推算してゐる。彼の割合を是認すれば、市民對奴隸の割合は七對九で、全人口を八十萬とすれば、市民三十五萬、奴隸四十五萬と云ふ數字になる。誠に不都合なことには、ローマに於る奴隸の數字が全然分明でないことで、この割合は單なる憶測に過ぎない。この點に關して我々の有する唯一の資料はペルガムスの町で、同市の出生であるガレンは同市に於る奴隸と自由民の割合を自由民二人について奴隸一人であつたと傳へてをる。若し之の割合がローマ市に當て嵌まるならば、ローマ市には廿八萬の奴隸が存在した事になる。ローマ市に於る貴顯富家は多數の奴隸を所有してをつた樣で、プリートレンダアの考證に據れば西紀六十一年に於てローマ市のプレフェクトスをつとめてゐたペダニウス・セクンドスの

と云ふ人は四百人の奴隷を所有してゐたさうであるが、貴顯富家の數が非常に少なかつた（後段參照）ことを思ひ合すれば、ローマ市に於る奴隷の數は左程澤山なものではなかつたと看做す方が安全である。恐らく二十二三萬と云ふ處が相當であらうと思ふ。しかし之も勿論、單なる推測である事は斷るまでもないのである。

四

共和時代の末葉に於て、ローマ市が異常の發展をなすと共に、市民は益々市中の中心地に密集して住居する樣になつた。之の爲に今日の大都市が直面してゐる樣な住宅問題を惹起した。ローマ市に於るコンヂエスションの問題は寧ろ今日より甚だしかつたかとも思はれる。之には三四の理由が擧げられてゐる。第一は、今日の如く交通機關が存在しなかつた爲に、郊外に居住することが甚だ不便であつた爲であらう。第二はローマ人が甚だしく都市生活を愛好した爲である。有名な諷刺詩人ユヴナルはローマ人に向つて、頻りに地方移住を勸告してをるが、ローマ人は少しも彼の勸告に從はなかつたらしく、之を嘆じてゐる言葉はよく之の邊の事情を傳へてゐる。卽ち彼はローマ市の陰慘なる陋屋に支拂ふ一年分の家賃を以て、充分、地方の小都市に於る快濶な住宅が買取れるにも拘らず、市民が之を悟らず、依然として雜沓の巷に陋居してゐる弊風を慨嘆してゐるのである。第三の理由はローマに於て、非常に公共建

造物の數が多く、この爲に市民の住宅區域が、益々狹まつたことである。ローマ市に於ては、住宅區域に比して公共建造物の敷地が尨大なる面積を占有してゐた。亦、市民の住宅を取拂つて、之をテルメ其他の娯樂機關の敷地とした事が屢々ある。之等の事態はローマ市に於て深刻な住宅問題を惹起するに至らしめた。しかるに、タキトスは住民の市内密集に對して、特異な理由を擧げてをる。マラリア蚊の脅威が之である。彼の云ふ處によれば郊外に住居するよりも城内の中央に密集して住む方がマラリヤ熱に侵される危險が少いと云ふので市民が市内に密集したと云ふ。甚だ奇矯の言の樣に思はれるが一面の事實をあらはしてゐると云はれる。

一體、ローマの地域は沼澤地に圍まれた不健康地である。キケロは瘴癘の地と呼び、リビウスも同樣な事を云つてゐる。ローマの氣候とこの沼澤地とを考へ合せば、同地はマラリヤ蚊の爲には絶好の溫床であるのは明かで、初期にはマラリヤ熱が猖獗を極めたことが想像せられる。これは初期のローマ市民が熱病の神を祀つた神殿を建てた事でも分る。確に熱病の神に捧げた神殿として知られてゐるものに三つあつて、一はパラチノの丘の上に、一はクイリナリスの上に、今一つはエスクイリヌスの上にあつたと云はれる。又、芝居にもマラリヤ熱に冒された情景が描かれてゐて、劇作家プラウトスのクルクリオ及びテレンケのヘキラの中の場面に出て來るさうである。また、カトーもプリニウスもその書中で熱病のことに觸れてゐる。後世に至つて上下水の建設、道路の鋪裝、墓地の改善、郊外の排水事業、醫療等

の爲にマラリヤ熱は餘程減少した樣であるが初期には可成り猛烈であつたと思はれる。故にこのマラリヤ問題も郊外の住民をして市内に密集せしめた原因の一をなした事は爭へない。

ローマに於ても初期の家屋は平屋であつて、且つ甚だ粗末なものであつたが、建築術の進歩と人口の增加とは次第に平屋に代るに二階家を以てする樣になり、遂には三階、四階或は五階の家屋が立ち並ぶ樣になつた。今日に於て、ローマの家屋の研究資料としてはポンペイの發掘が重要なものであるが、ポンペイはローマを去る百五十哩の地方にある小都市であつて、人口二三萬を擁したに過ぎず、其の家屋の高さも二階立てを限度としてゐるが、之を以てローマ市を律する事は出來ないのである。ポンペイはローマ人の建設せる地方小都市の典型としては貴重なものであるが、最近の發掘にかゝる、ローマ市の海港オスチアの遺蹟は、同市がローマに近く且つ其の影響を直接受けてゐる丈け、ローマ市そのものの風貌の一端を傳へるものとして更に貴重である。オスチアに於ては四五階の家屋と想像せらるゝものの遺跡が發見せられてゐる。オスチアにして然り、ローマに於て斯る高層建築があつたのは怪しむに足りない。

ローマ市には二種類の住宅があつて、一はドームス（Domus）と呼ぶ貴族の邸宅であり、一つはインスレ（Insulae）と云ふ平民の居宅で、インスレには數家族の平民が共同に賃借して住まつてゐた。インスラは文字通り、島と云ふ意味で、元來一のビルディング・ブロックを意味し、四方、道路に面して、

恰も島の如きものであつたから之の名稱が生れたのである。而して之のインスラは貸長屋であつて、今日のアパートメントにも相當するものである。アウグスツスの十四區の市に於ては、千七百九十のドームスと、四萬六千六百二のインスレが存在したと傳へられてゐる。即ち千八百ばかりの富裕な家族を除いては、全住民は之等の貸長屋に住まつてゐたのである。インスラは普通、地階は店鋪に貸し、二階以上から平民の一家族が各階を借りて住居してをり、時としては同じ階上に二家族の平民が住居してゐたこともある樣である。之等の貸屋は富豪の投資物として建造せられたもので、大低その所有者の名前を以て呼ばれた。インスラ・ボラニアナとかインスラ・セルトリアナとか云ふ名前が記錄に殘つてをる。ローマに初めてインスラが建てられたのは、紀元前四百五十五年であるとされるが、人口の增加と地價の騰貴の爲に敷地を節約する上から、四、五階の高層になつて來たのである。ローマ市に於て如何に地價が高かつたかはケーザルのフォーラムの敷地が當時一億セステルチウス即ち五百萬弗以上と評價せられてゐるのを以て分る。現今に於て紐育の市廳の地價と雖も到底之に及ばないと云はれる。四五階の高層であつて、しかも建築が甚だ粗末であつたから、貸長屋の崩潰が頻發して、其の爲に多數の人命を損傷することは當然であつたらしい。キケロは其の書翰中に於て、斯う云ふ椿事に觸れてゐるが、恰も尋常茶飯事の樣に冷淡視してをる。之を以て見ても如何に家屋崩壞が頻發したかを知る事が出來る。尤もキケロも數軒の貸長屋を所有してをり、その建物が修繕を要す狀態にあると云ふ消息を書翰中に洩らし

てゐる。兎に角、斯る有樣であるから、アウグスツスは遂に高度制限の法律を出し、個人の建物は七十呎を越へるを得ないことに規定した。後に至つて、トラヤーヌスは之を六十呎にまで低下した。千八百六十年に於て、伯林市の發布した建築規則は道路の幅員が三十六呎ならば、建物の高度もこの三十六呎を限度とすべしと規定してゐる。ローマ市の道路が三十呎より遙に狹隘であつて、しかも高度制限が其の倍以上である事を思ひ合すれば、如何にコンヂエスションの程度が非道かつたか容易に想像する事が出來る。ローマ市の住宅狀態は今日の孰れの都市よりも危險且不衞生なものであつたと云へる。只、幸なことには、ローマ人は非常に戶外生活を好み、食事の時と夜間睡眠の時を除いては、時間の大部分を戶外に於て費したから、これは住宅の非衞生狀態を非常に輕減した樣である。インスラの家賃は驚くべき程高く、最下級の者でも二千セステルチウス、大凡そ百六十圓の家賃を支拂つたさうで、コエリウスと云ふ人はプブリウス・クロヂウスの貸屋の三階を借りて、三萬セステルチウスの家賃を支拂つたと傳へられてをる。そこで、貸長屋を建てたり、又は之を一手で借受けて又貸しをするのは非常に利益があつた樣である。インスラはインスラリウスと云ふ管理人によつて管理せられ、市內に多數のインスラを所有する富豪は其の管理の爲に特にプロクラトール、インスラルームと呼ぶアパート差配人を雇傭してゐたことが記錄に見へてをる。

五

ローマ市は、其の初期に於ては、道路の計畫、建築の規定と云ふ樣なものは全然なかつた。隨つて道路の配置は亂雜を極め、建物は無秩序に立並んでゐた。しかも初期の道路は甚だ狹隘であつた。ヴィア・フラミニアの如きは全く例外である。ポンペイの發掘によつて知られる通り、同市の大通りは僅に其の幅員廿五呎を少しく越すに過ぎぬ。首都ローマに於ても之以上でなかつた樣である。殊に横丁の如きに至りては、實に七八呎の幅に過ぎなかつたと云はれる。之等狹隘なる道路に面して、先きに述べた樣に、四階五階の建物が並んでゐたから路面に日光の當ることは殆んどなかつた。其の上ローマ人は街頭の生活を好み、日中は居宅に蟄居してゐることはなかつたので、道路の雜沓は甚しかつたらしく眞に肩摩轂擊の狀態を現出した。之の事情はケーザルが日の出より以後十時間に亙つて、卽ち日中の間は、ローマ市の中央市街に於て、車馬の通行を禁止する法律を發布した事が、一番雄辯に物語つてゐる。若干の道路は今日の如く、鋪裝せられてゐたが鋪裝は道路の中央だけで、その兩側は溝渠になつて下水の役をしてをり、隨つて旱天には、穢物の堆積を見て、頗る不衞生であつたらしい。鋪裝の材料としては、時には切石を使用した事があつたが、多くは市の近傍より採掘し來た溶岩の平板を以てした。蓋しローマ地方は火山地帶であつたから溶岩は非常に豐富であつたのである。無論、今日の如き完全な鋪裝ではな

く非常に凹凸してゐて、歩行も決して安全ではなかつた様である。道路の清掃も甚だ稀にしか行はれず、不潔極まる狀態にあつたらしい。抑もローマ人が偉大なる道路建設者であつた事は云ふ迄もなく、チベリウスの時代に於てはイタリヤ、ゴール地方の全部、スペインの大部分は完全なる道路によつて交通せられ、同帝の如きは、オランダ旅行に際して、一晝夜に百里の道程を進んだと云ふ事すら傳へられてゐる。兎に角、ローマ全範圍に立派な道路を建設した事を想へばローマ市内の道路の狀態は一の錯誤であり、所謂る紺屋の白袴と稱すべきものであらう。

ローマ市が道路の配置及び幅員に留意する様になつたのは實にネロの大火の後の事である。之は後段ネロの都市計畫に觸れる處で云ふが、之の時の計畫によつて、道路の直角交叉を企圖したが、之は結局、ローマ市の丘陵的地勢の爲に不可能になつたのである。ローマ市の道路が相當の幅員を有する様になつたのはマクセンチウスの時代であつたと云はれる。彼以前に於ても、屢々道路の改善が企てられたが孰れも大した成功を收めなかつた様である。道路の維持は恐らく造營奉行の所管であつたと思はれるが、茲に興味あることはケーザルがローマ市の城門を距る一哩までの街道に沿ふ家屋の所有者に、その面する道路の改修義務を負はする法律を出してゐる事である。更に今日の市政研究から見て今一つ興味あることは道路について、受益者負擔あるひは特別賦課と看做すべきものをローマ人が行なつてゐた事である。之は皇帝の勅令中に之に類似した規定のあるので分る。(construat vias publicas unus quisque secun-

dum proprium domum)

次に街路照明のことであるが、ローマには之の設備はなかつた樣である。一體、ローマには夜の生活はなかつたと云はれてゐる。月明の夜は月明を利用し、闇夜は全く暗黑であつて、市民が夜中外出することは稀有なことであつた。但し大祭の時や、演技の行はれる時には、例のイルミネーションがあり、紀元三十二年、時のプレートルであつたルキウス・セヤーヌスはフロラリア卽ち花神祭の觀客を歸宅せしめざる爲に五千人の奴隷に、炬火を持たして案內せしめたと云ふ。其の外かゝる記錄は多數散見してゐる。帝政期のローマに於ては夜の催物は寧ろ普通であつたと思はれる。故にローマに夜の生活がなかつたと云ふのは極端であるが、しかし平日に於ては特に用事のない限りローマ市民は夜間外出することはなかつたと云つて差支へない。夜間の警備が非常に不完全で、外出が常に危險であつたのは、家屋の戶締りが恐ろしく嚴重であつたのを見ても分るが、其の外に、ローマ人は夜氣を嫌つたと云はれてゐる。之は恐らく前に述べたマラリア蚊の理由があつたのかも知れぬ。斯くの如く夜間の外出がなかつた爲に街路照明がなかつたのは當然であるが、一說に、紀元二百年頃よりローマ市に於て、燈心に火を點じて之を油皿の中に入れて廣場に吊したと云ふ事が云はれてゐる。千四百十六年、ロンドン市が冬期中に限つて、各家に燭臺を軒下に吊す事を命じたのが街路照明の元祖だと云はれてゐるが、若しローマに以上の事が行はれたとすれば、ロンドンはローマに一籌を輸することになる。更にアンチオキアが古代に

於て街路照明を行つた最初の都市だと云ふ説があるが、その方法は勿論分らず眞僞も保證の限りでない。

次に都市計畫のことを簡單に申せば、元來、都市計畫と云ふものは決して現代の產物ではない。已に希臘は偉大なる都市計畫ミレトスのヒポダモスを生じてをる。更に古くはエヂプト、バビロンに於ても都市計畫があつた。ローマ人の創建した都市のプランは大體ローマの軍營カストラから發達したものである。卽ち今日、格子式もしくは碁盤目式と呼ばれるものである。通路は互に直角に交叉して、四角のビルディング・ブロックを作り、中央に東西に亙るデクマースと云ふ大通りあり、又、南北に亙つて稍々、市街の端にカルドがある。最も簡單な例は伊太利に於てアオスタであり大都市としてはトリノである。又、北アフリカに於るチグマドは今日まで最もよく保存せられてゐる典型であり、中世の城下町が如何にローマ流の影響を受けたかを最もよくあらはしてゐるのは南部フランスのモンパヂエである。都市計畫に於るローマの貢獻は決して少しと云ふ事は出來ない。しかるにローマ市自身はどうであるかと云ふのに、之も燈臺もと暗しでローマ市はローマ流都市計畫の一の例外である。ネロは强壓的都市計畫者として甚だ有名であるが、ローマ市の地形は如何ともなす事が出來ず、道路を直角に交叉せしむる事は失敗して了つた。故に都市計畫に於てはローマは飽迄も非ローマ的である。然るに、ネロの計畫に現今の目から見て誠に興味ある點が二つある。一つは當時、已に個人が建物を建築するに當つて、次第に

道路面を蠶食する弊風が起つて來たので、之を防止する爲に建築法を規定し、道路に接する建築物の間口は官憲によつて立會ひ認可を要するとした事で、二つは、建物の高さは其の面する道路の幅員の二倍を越ゆる事を得ないとした事である。之は今日アメリカに於る若干の都市が行つてゐる建築法そのままである。又、ネロは有名なセヴエルスとケレルの兩技師を起用した事で著聞してゐる。また都市計畫に對するローマの貢獻の一つとして、都市計畫に關する最初の著作を發表したヴイトルヴイスを生んだ事を逸する譯には行かないであらう。